

艦隊これくしょん—艦
これ—

ハープ^oatハイスペック雑魚

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

艦これ。

皐月と春雨がイチャイチャします。皐月のキャラがおかしいです。ほとんど、オリキャラ状態です。あらすじは苦手なのであえて書きません。

目次

遅咲きの桜編 1	1	遅咲きの桜編 8・前―潜水母艦の苦悩	49
遅咲きの桜編 2	4	遅咲きの桜編 8・中―潜水母艦の苦悩	55
遅咲きの桜編 3	9	遅咲きの桜編 8・後―潜水母艦の苦悩	61
遅咲きの桜編 4・前	15	遅咲きの桜・特別編―節分	67
遅咲きの桜編 4・後	21	遅咲きの桜・特別編―それぞれのバレン	72
遅咲きの桜編―幕間 1	25	タイン前日	76
遅咲きの桜編 5―とある日常	29	遅咲きの桜・特別編―それぞれのバレン	81
遅咲きの桜編 5のあとがき	36	タイン(春雨)	76
遅咲きの桜編 6―皐月嬢の災難	39	遅咲きの桜・特別編―それぞれのバレン	81
遅咲きの桜編 7―潜水母艦の苦悩	43	タイン(皐月)	81

遅咲きの桜編 1

1月9日(水) AM10:00 — 快晴 —

太陽の光に反射して、海が光輝いている。——たしか水平線までの距離は4.5 kmだったかな。などともうでもいいことを考えながら皐月は海の上を走る。

皐月のうしろには少し緊張した表情の艦娘が5人。全員タイプは駆逐艦だ。

しばらくブーツとしながら、走っていると、頭に乗っている妖精さんが皐月の特徴的な金髪をグイッと引つ張った。おつとあやうく通り過ぎちやうところだった。危ない、危ない。

速力を落とし電探を確認する。

——敵影なし。これより帰還する。と告げると5人がホツとした表情になった。

哨戒任務でそんなに緊張することないのにと思ったが、皐月も新人の頃はこんな感じだったので人のことは言えない……。

鎮守府に戻ると皐月は執務室に向かった。今日の任務の結果を報告するためだ。

他の5人には休むように言った。5人は艦装をはずして西に向かった。恐らくお風呂だろう。

コンコンと扉をノックするとすぐに、どうぞと返ってきたので扉を開ける。

「司令官。失礼するよ」

と言つて執務室に入ると一人の女の子、否艦娘がいた。桃色の髪をサイドテールでまとめて白いベレー帽を被っている。

「丁度良い所にきた。紹介するよ。この子は春雨。今日、着任したばかりの新人だ」

司令官の佐東竜也がイスに座りながら春雨を紹介した。

「し、白露型駆逐艦春雨です！よ、よろしくお願ひします！」

「あ、うん。ボクは睦月型の皐月。よろしくな」

相手はかなり緊張しているようだ。初対面で初めての場所とはいえこんなにも緊張する子は珍しい。二の句が次げなくなっていると…。

「皐月・・・その子の教育係りを任せたいんだが・・・やつてくれるか？」
と

司令官が聞いてきた。

はて？教育係りと言えば練巡の鹿島さんや、軽、重巡の人が受け持つものではないだろうか？なぜ駆逐艦の自分に？と思っていると、

「いや、うちで一番練度の高い駆逐艦はお前だろ？お前もそろそろそういう経験をして
も良いんじゃないかなと思つてな。それにこういうの得意だろ？」

と言ってきた。

ウソじゃない。皐月は人に何かを教えるのが得意だし、けっこう好きだ。

だが……この子は……と春雨を見る。正確には春雨の制服を……。

春雨に目を向けていたので春雨と目があった。とても不安そうな顔をしている。捨てられた子犬のような……、まるで昔の自分のような顔。この顔をみたら、さっきの悩みなどどうでもよくなった。

「分かったよ。そのお願い引き受けてあげる」

苦笑いで答えると春雨がパツと笑顔になった。

——うん、この子には笑顔が似合う。

遅咲きの桜編2

ここはショートランド泊地。つい最近までは最前線だったが前線が上がったことにより、とても平和である。だからといって完全に深海棲艦がいなくなっただけではないので、止まり木の鎮守府とも言えない中途半端な鎮守府である。

その鎮守府の波止場に一人の少女が立っていた。年は10代前半またはそれ以下かもしれない。長い髪を後ろで結わえている。時折吹く強い風が少女の鮮やかな金髪をなびかせている。一言で言えばとても絵になる光景だ。

「あの…」

そんな少女に話しかけたのは一人の少女だ。こっちは対照的に淡いピンク色の髪をしている。

金髪の少女は振り返り「あつ」声をあげた。

「ごめん。ごめん、春雨。ブーツとして気づかなかった」

行こうか、と言って歩きだす少女。「それって私は影が薄いってことですか？」と愚痴りながら春雨と呼ばれた少女はトコトコとそのあとをついていくのでした。

1月10日(木) PM3:00 — 晴れ —

「今日は艤装をつけて海に浮く練習をしよう。まずは海に慣れることが重要だ」

次の日、さっそく訓練を開始する。ちなみに春雨は午前中は座学だったらしい。今月着任した子に混じって艤装の仕組みやメンテナンス方法を夕張先生に習ってきたらしい。

午後からはそれぞれの教育係りのもとの実践訓練をする。

「それじゃ、さっそくやってみよう」

「は、はい」

周りの子も同じことをやっているが基本は1対4だ。それに対して、春雨は1対1。つまりはじっくり教えられるということであって。。。

「違うよ。そうじゃない、こうやるんだ」

「もつと力を均等に、スキーをやる感じで！」

「おっ、そうそう！良い感じだよ！」

時刻は5時を回ろうとしていた。太陽はすでに沈み始めている。春雨は地面に突っ伏している。夕焼けが彼女の汗をオレンジ色に輝かせている。

「お疲れ、春雨」

「も、もう無理です。一歩も動けません…。」

「そうだね。今日はもう暗くなるから終わりにしよう」

春雨の手を引いて起こす。

「まずはお風呂にしよう」

鎮守府には大浴場がある。訓練、出撃終わり、夜戦前などが重なりこの時間は大体混んでいる。

今日もその例に漏れずに混んでいた。しかし、腐っても大浴場である。まだまだ余裕がありそうだ。

「ふえ〜。人がいっぱいいます…」

と春雨がびくびくしている。どうやらこの子は人見知りらしい。

「大丈夫だよ。こっちおいで」

春雨の手を引いてイスに座らせる。キョトンとする彼女に頭からシャワーを浴びせる。

「わっ！キャッ！」

と叫んで、こっちを睨み付ける。迫力は全然ない。むしろ可愛い。皐月はニカッと笑ってゴメン、ゴメン。と言った。

「お詫びに背中洗ってあげるから」

「自分で洗います」

「遠慮しないで！」

「キャツ！ちよつとおく！」

勝手に洗い始める皐月。しばらく抵抗したがムダだと気付いて止めた。

その後、皐月は春雨に背中を洗ってもらい、二人で湯船に浸かる。

「ふう〜」

と二人して今日一日の疲れをとるように息をついた。

「今日の訓練だけどさ・・・」

しばらくしてから皐月が切り出す。

「・・・はい」

「だいぶ良かった。うん、スゴいよ。一日で走れるようになる子はなかなかいないよ」

結論から言えば、春雨の吸収力は相当のものだ。普通は3日かかる海上航行を1日で習得したのだ。ちなみに皐月は5日かかった。

「これなら明日からは砲撃訓練に入れるよ」

春雨はスゴく照れながら、

「い、いやあ。先輩の教え方が上手かったただけですって・・・」

と言った。

「なあ、昨日も言ったけど、その先輩っていうのなんとかならないかな？なんていうか、スゴくムズムズする・・・」

きっとあの人もこんな気持ちだったのだろう。対する春雨はいえつ、と言った。「先輩は先輩ですから！」

よく分からないところで頑固な春雨であった。

遅咲きの桜編3

艦隊これくしょん—艦これ—

遅咲きの桜編3—とある日常—

1月11日(金) PM3:00—晴れた—

次の日から春雨の砲撃訓練を始めることにした。

「まずはあのを狙ってみて」

「あそこですか？少し遠くないですか？」

二日も経てば緊張もとけて、春雨はよく喋るようになった。

「いいから、いいから。まずはやってみる！」

はあ、と言いながら12.7cm砲を構える。

ドンツと大きな発射音と共に放たれた弾丸は的を通り越してかなり遠くに着弾。水しぶきをあげる。

大きな音に周りで浮く練習をしていた艦娘たちがビクツとなつて一斉に転んだ。

・・・春雨も尻餅をついている。

「むう。むずかしいです！」

手を引いて立たせると、春雨が口を尖らせた。可愛い。

砲頭では妖精さんたちがエツチラ、オツチラと弾の詰め替えをしている。しばらくしてガコンツと小気味のいい音がして、詰め替え作業が終了した。

「さあ、さあ。さっきのを踏まえて角度を調整して撃つてみよう！」

しばらく、撃つと当たるようになってきたが距離を変えてみるとやはり当たらなくなってしまう。

「あの先輩。これってこの距離なら仰角何度って決まってるんですか？」

春雨がそう聞いてきた。ふむ… そう来たか。

「例えばあの距離なら何度だと思う？」

皐月は逆に問い返した。

「え？えつくと、25度くらいでしょうか？」

律儀に答える春雨。しかし、

「答えはボクも知らない」

といいながらに無造作に砲を構えて撃った。砲弾は的の真ん中からやや右に見事命中した。

「今、ボクの砲は何度だ？」

と聞いた。

「えつと… 28度です」

「うん。そうらしいね。いいかい春雨？実戦ではいちいち仰角を考えてるヒマはないんだ。敵も動いてるし、ボクたちも動き回ってるんだ。距離やら、角度を考えてたら撃たれちゃうよ。だからボクたちはこれを直感的にやってるんだ」

「直感的に？」

「そう。敵との位置関係がこうならこれくらいで当たるとして具合にね。角度を計算するのと同じようにみえるけど本質は全然違う。まあこれに関しては慣れるしか無いよ」

まあ、これを計算でやってる化け物戦艦がいるがあれは別物だ。

「…なるほどです」

納得はしたのだろうか未だに実感が無いようだ。仕方がない。これに関しては本当に慣れてもらおうしかない

それから春雨は熱心に撃ち続けた。距離を変え、角度を変えて撃ち続けた。気付けば、時刻は6時半をまわっていた。

お風呂（時間が時間なので空いていた）に入り、食堂へと向かった。

「今日はお疲れ。今日はボクがパフェ奢るよ」

食堂の食事は基本無料だが、こういうデザート類や一部のメニューは有料だ。

「そんな、悪いですって！」

どうもこの子には遠慮する癖がある。

「後輩は……先輩に甘えるものだよ」

「でも、でも」

「それに遠慮を戦闘に持ち込まれても困る」

それは時に艦隊を危機にさらすこともあるから……。

「あ、あう」

さすがにそこまで言われると何も言えないだろう。

「セットとパフェ二つつ」

と鳳翔さんに注文する。鳳翔さんは艦娘でありながら、現役を引退しこうやって艦娘たちの食事を作ったりと、後方支援にまわっている。ちなみに、料理はメチャクチャ上手い。夜は居酒屋もやってるのだが駆逐艦は入れないとのこと……解せぬ。

「はい、どうぞぞ」

鳳翔が料理を運んできて、二人で「ありがとうございます」と言っ席に着く。

「このパフェとあんみつは絶品だよ！ さあ食べて！」

何故かご飯よりパフェを先に食べ始める皐月。なんとも奇妙な食べ方だが食べ方は人それぞれである。

「は、はあ」

一方の春雨はちゃんとご飯から食べ始めている。

しばらくして、春雨がパフェに手を伸ばす。……やつぱり躊躇っているようだ。ああもう！と言いながらに春雨のパフェを奪い取る皐月。スゴく悲しそうな顔をする春雨。早く食べればよかつたな！と言つていじめてやりたい顔である（要するに可愛い）。

「はい、あ〜ん」

「ふによっ!?!」

顔を赤くして固まる春雨。皐月は構わず、

「あ〜ん」

「あの……先輩。さ、流石にそれはは、恥ずかしいです」

「あ〜ん」

「じ、自分で食べますから。ちゃんと食べますから」

「あ〜ん」

「……」

「あ〜ん」

「……あ、あ〜ん?」

観念して口をあける春雨。顔は真つ赤である。

んぐつ！と喉に詰まらせあわてて水を飲む春雨。そして……

「ん!? 美味しいです!」

と目を見開く。

「でしょ? はい、もう一口。あゝん」

「さ、流石に自分で食べます!」

パフェを奪い取られてしまった。残念。その後、春雨は遠慮することなくパフェを平らげ。以外に大食いなんだな、と皐月が呟くと顔を真っ赤にして俯いてしまった。

遅咲きの桜編4・前

1月16日（水） P M 3：00 — 晴れ—

「今日はお撃する。君もついてきてくれ」

春雨を引き取ってから一週間が過ぎたある日のことである。

「・・・え？」

「あ、あの。まだ早いと思いませんか？」

春雨が尋ねる。久々の緊張モードだ。

「大丈夫だよ。演習もやってるんだからあとは実戦を積むだけだよ！」

それに今回の標的はイ級のはぐれ艦隊だ。めったに沈むことなんてない。

「何事も経験だよ春雨！やらなきゃ上手にならない」

それを言われると何も言えなくなる春雨。どうもこの子は正論で返されると黙り込んでしまう。つまりは正直なのだ。—騙されやすそうで、守ってやりたくなくなってしま

う。
「見えたよ」

そこにはイ級が4隻漂っている。こつちには気付いてないようだ。

春雨が身構える。他の子達はじっとイ級を食い入るように見ている。

今回は羽黒さんから、曙、巻雲、山風を預かって来ている。みんな、羽黒さんがいなくて不安そうだ。そんなにボクって頼りない？と苦笑しながら声を張った。

「みんな！砲を構えて！」

皐月の言葉に我に返った3人が砲を構える。

「え、えつと…」

春雨は戸惑っている。そりやそうか。出撃初日で旗艦だもんな。仕方ない…

「春雨…まずは目標の確定と装備の指示だよ」

「あ…えつと、も、目標…はぐれ駆逐隊。イ級4隻。装備は各自に任せます。えつと、

その…せ、戦闘開始！」

4隻で突っ込んでいく春雨たち。死角から現れて慌てているイ級たち。しばらく当たらぬ弾のやり取りが続く。弾が近くに落ちて水柱が上がるたびに、きやく、きやく、言う新人たち。懐かしい光景である。とてもほのぼのしている。なるほどあの人が苦笑する気持ちがあった気がする。だが当の彼女たちは生きるか死ぬかの瀬戸際にいるわけで…

「うひゃ、被弾!?沈んじゃう！」

「この、この・・・何で当たらないのよ!?」
などなど。

「・・・疲れました」

「お疲れさま。みんなもお疲れ!」

正直指揮もあつたもんじやないが何とか倒すことが出来た。ちなみに、さっきのは被弾ではなく至近弾だ。

「さて、みんな。早く帰ろう。こんなところにいたら他の深海棲艦が来ちゃ・・・」

ドンツ!

来ちゃうと言おうとした瞬間に発砲音と共に近くに水柱が上がった。

四人がきやつと叫び、皐月は後ろを見る。

「・・・はあ?」

そこにいたのは戦艦ル級率いる。重雷戦隊だった。6隻フル編制。

戦艦ル級、重巡り級3隻、駆逐2隻。

「いくらなんでも早すぎる・・・これは新人潰しだ」

新人潰し——ハグレ艦隊などを餌にして出撃してきた新人艦を撃墜していく深海棲艦の外道な罠だ。

「春雨! みんなを連れて、撤退! 急いで!」

「は、はい」

慌てながら他の子に指示を出し始める春雨。誰よりも早く立ち直ったのは評価できる。

「さて…」

皐月は敵艦隊へ向き直る。そして、急速に前進する。彼らも慌てて砲を皐月に向けるが…

「へっ…遅すぎだよおくだ！」

すでに懷に飛び込んだ皐月は駆逐艦に向けて12.7cm砲を発射。――まずは二体。後ろにまわってすぐに反転する。やつらも反転をするが反転速度が違いすぎる。横っ腹に魚雷をぶつける。リ級二体がそれぞれ中破と大破。抵抗で放った砲が皐月に当たった。

「チツ、片方やられた」

と言つて右手の12.7cm砲を捨てる。もう片方の砲で二体を破壊。――残り二体。

「…ッ！」

しかし、戦艦たちは皐月の撃破を諦めたのか反対を、つまりは撤退している春雨たちの方を向いた。

「しまった…」

戦艦が放った砲は弧を描き、巻雲へ吸い込まれていく。さっきまでのカスダメとは訳が違う。直撃ルートだ。しかも戦艦の16inch砲が。

「マズイ！巻雲！逃げて！」

叫ぶが全ては手遅れだろう。砲弾に襲われて火を浴びながら沈んでいく巻雲を幻視した……

……しかし、砲弾が巻雲に届くことは無かった。途中で爆発したのだ。

「！」

見ると春雨が肩で息をしている。春雨が構える12.7cm砲の先からは白い煙が出ている。

「ハア……ハア……先輩！」

……分かつてるよ。皐月は敵に突っ込む。二人して皐月に後ろを向けるとはなんと無防備な……。まずはリ級を後ろから引つ掴み投げ飛ばす。リ級は戦艦ル級を巻き込んで転んだ。容赦なく魚雷を発射する皐月。余らすことのない全弾一斉射。それはそれは「雷鬼」の名に相応しいもので……

皐月は息も絶え絶えなル級に近づいていく。リ級はとつくに沈んだ。

「さて……たいぶ調子に乗ってくれたね？」

凍り付いたような皐月の声に怯えるル級。

「きみ、途中でボクに背中を向けて、あの子達を狙ったよね？あれ、許せないね」
深海棲艦に言葉が通じるのかは分からない。

「まあ、いろいろ言いたいことはあるけどき……」

だが少なくとも皐月の怒りだけは十二分に伝わったはずだ。

「ボクの後輩に手を出してんじやねえええ!!」

瀕死のル級に止めを刺すために12.7cmを連射。わざと急所を外して苦しませながら殺す。まるで悪の所業だ。やがて、体が沈み始めたル級に、

「ボクと出会ったことが運の尽きだね」

と言った。

さて、と言って春雨たちを振り返る。

「帰ろうか」

笑顔が怖いとはこの事なんだな、と春雨は感じた。

遅咲きの桜編4・後

1月16日(水) PM6:11 —晴れ—

母港に帰ってきたときには日が沈みかけていた。ボクは司令官に報告があるから、とみんなには解散を告げたのだが、何故か曙と山風はくつついてきた。

「……あの着いてこなくて大丈夫だからね？」

「いえ、どこまでも着いて行きます！」

「……わたしは別に着いて来てるわけじゃ……」

山風、曙の順で言う。曙はツンデレなので逆の意味を持つ言葉だと解釈出来る(だつて実際着いてきてるし)

何度目かのやり取りにため息をつく皐月。横目で見ると春雨も巻雲に取りつかれている。はあ……とまたため息をついた。それは今から一時間ほど前のことである。

—一時間前

「帰ろうか？」

と皐月は言った。全員がこつちを見ている。否、一人は春雨を見ている。

「ん、どうしたの？」

ずっと、見られていると流石に気持ちが悪い。

「し、師匠！」

しばらくして二人―曙と山風が呟いた。

「え？」

「師匠と呼ばせて下さい！」

代表して山風が叫ぶ。隣で卷雲が「姉様〜！」なんて言つて春雨に抱きついている。

「え？」

春雨も同じ反応である。

「いや〜、師匠！スゴかったです。一人で6隻しかも戦艦も落としてしまうなんて！」

「あの…」

「姉様！ありがとうございます！この卷雲！この恩は一生を使つて返して見せます！」

「あの…」

「特に最後の決め台詞！あれ格好よかったです！」

「あ…」

思い出して恥ずかしくなる。なんだっけ、ボクに会ったのが… っって恥ずかしすぎるんですけど!?!

「ほんとうに、ほんとうに格好よかったです姉様！姉様大好き！」

「・・・」

顔を真っ赤にして俯く春雨。

「勘弁して」下さい」

と二人呟くのだった。

それから皐月は山風たちから「師匠」と、春雨は卷雲から「姉様」と呼ばれるようになった。

山風と曙に至つては「教育係を変更したい」とまで言い出し、「それは羽黒さんが泣くから！」と断るのに苦労した。

「そうか・・・またか」

何とか二人を引き剥がすことに成功した皐月は新人潰しに関して司令官に報告を入れた。

「確かに、最近、那智さんのところも遭遇したって言つてたし：：今月に入つてこれ三件目だったっけ？」

「ああ。何か有るかもしれない。こつちでも調べてみる。報告ありがとう」

と言つて、司令官が秘書艦の加賀に皐月の報告書を渡す。加賀に渡すと言うことは本格的に調査するということだ。

失礼します、と言つて執務室を出ようとする皐月を司令官が呼び止めた。

「今日は6隻を一人で倒したんだって？ スゴいじゃないか」

と言つて、皐月の頭を左手で撫でる。薬指には何も装飾が施されていないシンプルなデザインの指輪をはめていた。

「ふふつ、やめろつて。誉めるなら春雨を誉めてくれ。何たつて砲弾を撃ち落としたんだから」

まんざらでもない皐月。

「ああ、そつちは後でイヤと言うほど誉めてやるさ。まずは皐月の番だ」

と言つて、皐月の頭を撫で回す。皐月は気持ち良さそうに目を細めた。

「お前はよくやつてる。こんなにも強くなっちゃった。でもさ、少し休んでも良いんじゃないか？」

「ふふつ、大丈夫だよ司令官。ボクは好きでやつてるんだ。ボクはこれからドンドン強くなるよ！」

司令官は「そうか」と言つてそれ以上は何も言わずただ黙つて皐月の頭を撫で続けた。今の皐月にはそれが心地よい。

遅咲きの桜編―幕間1―

1月17日(木) PM3:00 ―晴れ―

今日はよく晴れている。おまけに風も無いので暖かい。

「・・・昼寝でもするかな」

と言つて皐月は屋上へと向かう。今日は春雨の練習は休みだ。

あの後、春雨はちよつとした有名人になった。何しろ、砲弾を撃ち落とすなんてことやつたんだから当たり前か。最も本人は「ぐ、偶然ですよ！偶然！」と言つていたが・・・きつと今日もどこかで取り囲まれてるはずだ。艦娘は噂に飢えているから。

屋上には誰もいなかった。好都合だ。皐月は自前の枕(常備品)を敷いて、横になった。うん、よく眠れそうだ。

「作戦は失敗！撤退！撤退！」

「先輩早く撤退しましょう！私が先導します！」

「・・・ダメだよ。ボクにはまだやるべきことがある」

「ツ！先輩それって・・・ダメです先輩！それは・・・」

「ここでボクが退いたら日本は負ける・・・どのみちこれじゃあボクは戻れないよ」

「それは……ッ！……分かりました。撤退……します」

「うん、それでいい」

「……それでいい」

外が騒がしいので目を開けると春雨、曙、山風、巻雲がいた。

「あ……！先輩、やっと起きましたね！」

「全く、とんだ寝坊助ね！」

「し、師匠！ぜひこの山風にご教示を！」

「そんなことより姉様！あつちで巻雲と遊びましょうよ！」

三者三葉……いやこの場合は四者四葉と言うべきだろう。

「こんなところで何をしているんだい？」

皐月は時計を見る。もう一時間も経っていたのか。

「先輩を探していたんですよ！こ、これからご飯を外に食べに行こうと思うんですが、先輩も一緒にどうですか？」

春雨が言った。

「皐月さん！姉様は今日も練習があると思つていつもの場所で皐月さんを待つてたんです！……半泣きで……それはもう可愛くて可愛くて」

「ちよ、ちよつと、巻雲！それは言わないでつて……ち、違うんです！先輩！今日は特

訓が無いのは知っていましたがど行ったらいるかなあ〜って思っただけで…」
「うんうん、分かってる」

と答えながら、何とも春雨らしいミスだろうと思う。彼女はかなりおつちよこちよいさんだ。そこが可愛い。「絶対に信じてませんね!？」と言う春雨の文句を無視して、
「確かにお腹空いたな。ボクも一緒に行くよ」

と答えた。

ここはシヨートランド泊地。今日もこの艦娘は元気に動き回っているのであった。

・・・ウツソろ。文字数が48文字足りないじゃん。てなわけでハープです。皐月の過去が垣間見える幕間・・・ちなみにこれ幕間（まくあい）って読むんですね。いまま

で「まっかん」って読んでたわ恥ずかしい。おつと話が逸れた。この幕間は最初は書くつもりはなかったんです。というのも、皐月の過去にあまりに触れすぎているから。

しかし、とある敬愛する先輩の「入れた方が分かりやすいんじゃないかね？」という言葉で入れました。そう入れたのです。これのおかげで皐月に何があつたのか大体察してもらえらると思います。

でも・・・読むのを止めたりしないかね？

てなわけで字数も越えたので今回はこの辺で。ではまた次回お会いしましょう！以上ハーブでした。

遅咲きの桜編5―とある日常―

1月19日（土） AM10:00 ―晴れ―

「ふわぁ…」

皐月は大きな欠伸をした。まだ1月だと言うのにシヨートランドは暖かい。ここは年中暖かい。

「もお… 皐月先輩、またゲームで徹夜してたんですか？」

「そうなんだよ。でもそのおかげでバイオ2のハンクモードノーダメでクリア出来たんだよ！」

皐月はこう見えてレトロゲーマーだ。ちなみに、レトロゲームとは、PS2以前のゲームを表す。

「ダメですよ。皐月さん。夜はちゃんと寝てください」

そう言っただけ来たのは羽黒だ。本日はこの3人で土曜の休日を謳歌するために商業施設―俗にシヨッピングモールやアウトレットと呼ばれる場所―に来ている。―もつとも狭いシヨートランド島内ではここぐらいしか娯楽が無いのだが。

「寝るつもりだったんだよ？今日は昼まで寝てられるなって思ってたのに…」

皐月は恨めしげに春雨を見る。

「私は昨日ちゃんと言いましたよ？先輩はちゃんと「分かった」って答えましたよ？」

「そうだったか？何しろ昨日はバイオ2をレオン表、クレア裏さらにはハンクモードと豆腐モードを一夜でやってたから覚えてないや。ちなみに豆腐モードはまだクリア出来ていない。」

「まあまあ、と、とにかくここまで来たんですし、とりあえず中に入りましょう！」

「険悪な雰囲気になりかけていたのを羽黒がストップをかけるのだった。」

「え？先輩、私服持っていないんですか？」

「シヨップینگモールの中にある服屋で春雨が聞いてきた。」

「うん。別に必要なかったからね」

「さっぱりと言ってるのける。正直女子としてはどうなのだろう？」

「・・・ダメです」

「え？」

「春雨がボソツと呟いた。何がダメなのであるう？」

「先輩、このままじゃダメです！ダメ人間になっちゃいます！」

「いや・・・そんな服ごときで・・・」

「服は心の鏡とも言います！ダメです。先輩には今ここで服を買ってもらいます！」

こうなつた春雨は止められない。まだ一週間しか経っていないが、皐月は充分にそれを分かつていたので特段抵抗することはなかった。

・・・服が変わると気分が変わるとはどうやら本当のようだ。あの後、春雨の着せ替え人形と化した皐月だが最後にはそんな感想を持っていた。脱ぐのも勿体ないのでそのまま着て帰ることにしたくらいだ。

「先輩！とてもよく似合ってます！」

「本当・・・まさかこんなにも化けるなんて」

普段無頓着な分、二人（特に羽黒）が感嘆の声をあげている。確かに可愛い。上は白いシャツに紺色のパーカー、合わせるようにカーキ色のショートパンツ。また、服に合わせていつも後ろで結んでいる髪を下ろしたのも自分にとっては挑戦的だ。

「さあ！次はあそこに行きましょう！」

「・・・マジか」

結局あの後服屋を4軒、普段は使わない化粧品まで買わされた。そして今はゲームセンターにてゲームを楽しんでいる。

「春雨。まずはこのゲームで遊ぼう。」

「？これですか？何ですかこれ？left4・・・」

「left 4 deadだよ。ただのFPSさ」

「うへえ… FPSですか… 私苦手ですよね…」

「大丈夫だよ！これはボクと協力してクリアを目指すものだから！」

「そうなんですか？それでしたら…」

と始めたのだが…

「うひゃっ!?こ、これってゾンビが出るんですか!？」

「ん？そうだよ？言ってなかった？」

「き、聞いてないです！」

「そっか。あつ、でももうお金入れちゃったし… ワンプレイだけ」

「…分かりました」

お金はムダに出来ない。お小遣い制の艦娘の悲しい性である。

その後、ゾンビの真ん中に置いてきぼりにしてみたりと春雨をさんさん弄り倒して、

「着せ替え人形」の分をきっちり返さしてもらった皐月であった。

「グスン…先輩酷いです」

「いや、本当に悪かった。ごめんって」

春雨は本当にゾンビが苦手だったのか最終的に泣いてしまった。そういえばバイオ

2のパッケージ見たときもビクツとしてたような…

「そ、そういえば羽黒さんは？」

未だにすすり泣く春雨に耐え兼ね、羽黒を探すがどこにもいない。
「？」

やっと見つけたと思ったたら何かの筐体をいじっているようだ。何だろうと近づくとそれは音ゲーの筐体だった。それを一心不乱にやってる羽黒はちよつと怖い。普段の優しい感じとは正反対である。あとメチャクチャ上手い。

「……あつちに行こうか」

「……そうですね」

皐月たちはこの事実を見なかったことにした。

夕方にはシヨップینگモールのフードコートで食事を取ることにした。何だかんだで昼を抜いてしまったのだ。羽黒は、定食を。皐月と春雨はラーメンを持ってきた。しばらく無言で食べる。だが周りは騒がしいのでお互いの食べる音が聞こえたりはしなかった。

「そういえば、羽黒さん。山風たちは良かったんですか？」

今更ながら皐月が聞いた。

「うん……誘ったんだけどね……断られちゃった……」

「……」

いたたまれない。なんかいたたまれない。

「あつ！別に嫌われてるとかそんなんじゃないよ!?」「さっちゃんも来るけどどう?」って誘っても用事があるって言ってきたから… きつと… うん… 多分」

「… さっちゃん?」

そこで口を挟んできたのは春雨だ。どうやらさっちゃんに敏感に反応したらしい。

「… 羽黒さん…」

一方の皐月は目が死んでいる。

「ねえ、ねえ。先輩。羽黒さん。さっちゃんって何ですか? 昔の先輩のニックネームですか?」

恐らく悪気はない。悪気はないのだが春雨は間違いなく皐月のメンタルポイントにダメージを与えていた。

夜になり、シヨツピングモールを後にして、歩いて鎮守府に帰る3人。春雨はずっと笑っている。

「あはははっ！先輩にもそんな純粋な時期があつたんですね!」

「…」

ゾンビのお返しとばかりに言うてくる春雨。もうやめて、ボクのライフはもうゼロだよ。

「… でもでも、どうしてこうなっちゃったんですか?」

・・・おい、春雨？それは何か失礼だぞ。

「本当にどうしてなんでしよう・・・」

羽黒さんも賛同しないで！もう耐えられん！

「・・・春雨。月曜から指導教官を羽黒さんに変更ね」

「あつ！やめてください！やめてください！嘘です！昔も今もとっても可愛いです！特に今の方が！」

「うるさい！可愛いって言うなあ〜！」

やいのやいのと言ひ合ひを始める二人を見て羽黒は

「・・・いいなあ、あの二人」

と呟くのだった。

遅咲きの桜編5のあとがき

やつほろお〜！ハープだお！今回は丸々1話使つてあらすじを書くというアホなことをするよ・・・うんバカだね。そろそろあとがき作家とか言われそうだな。今回は愚痴から謝罪までいろいろと詰め込んでるので、いつも僕のあとがき読み飛ばしてる人はスルーしてね。

さあさあ一個目は・・・なんだろうね。うん初めて舞台をショートランドにしたのを後悔した。

というのも、今回書いたのは日常編でよし買い物しよう！つてなつたんですよ。それで「ショートランドつて何があるんだろう？」つてなりました・・・まあ・・・観光地なら何とかなるだろう。ネットで調べようと調べました。なんとショートランドに関するものが一向に出てこない。―調べかたが悪いだけかもしれないけどソロモン諸島の島々なら出てくるんですがショートランド島に関するものが出てこない。どうしよう？どうしよう？と悩んだ挙げ句、「に、日本の占領地なら日本らしいものあるよな」という結論に至りショッピングモールを展開！さらにはゲームセンターまで設置しました！なので・・・

この小説内で出てくるショートランドはハープの妄想ですので現実のもの異なる場合がござります。ご了承下さい

と断っておきます。これ以降僕の小説の影響でショートランドに旅行に行っちゃうような奇特な人のことは知りません。本当にいないと思えますが知りません。

二つ目、あとがきについて。遅咲きの桜編5にくつついていたあとがきのことです。あおたまとか言うよく分からないやつがおるな。と思われた方。あなたは正常です。

もし俺の知り合いにそんな人いるかも……。という方、ハープのドツペルゲンガーの可能性が有ります。ハープの地元絶対にこないで下さい。梓川咲太くんの近くに住んでいます。

本題に……。あおたまですが、たまに登場します。登場は気分です。僕の気分ではなくあおたまの気分です。彼女が「今日出るわ」と言うと出ます。それ以外の日には出ません。

三つ目、皐月について、あとがきで述べた通り本作の皐月はキャラ崩壊が発生しております。もはや皐月ではなく五月、もしくはサツキと思つて見てください。

そして、皐月について謝罪することが一点。遅咲きの桜編の2か3あたりで皐月はポニテという描写がありましたミスです。彼女はポニテではありません。正しくは「二つに分けて後ろで結んでいる」が正解です。申し訳ありません。艦これファンを引退し

ます。m () m

さて紙面がいい感じに埋まったので今回はこの辺で。ではまた次回。さよならあゝ

2019. 1. 19

とある舞鶴鎮守府提督・ハーブ

遅咲きの桜編6―皐月嬢の災難―

1月22日(火) PM4:00 ―晴れ―

「皐月。お前今日から春雨と同室な」

「・・・はい？」

「皐月。お前今日から春雨と同室な」

「二度言わなくても分かってるよ」

司令官の佐東竜也が唐突にそんなことを言った。

「・・・なんで？」

皐月はそう聞き返していた。

「お前・・・それ本気で言ってるのか？」

本当は分かっている。深夜までずっとゲームやってるからだろ？ばかやろお！だけ
どね・・・

「司令官、聞いてくれ！ボクが夜通しゲームをするのは、休日の前日だけなんだ！」

「・・・今月に入っつての朝礼への遅刻回数は6回だ」

「うっ・・・」

違う。あれは違うんだ。ただ純粹に寝坊してるだけなんだ……。

「まあ……その辺も含めて春雨にしっかり見てやれと頼んどくよ……お前のおかげで随分遅くなったしな。なにか言いたいことは？」

「あるぞお……ッ！ボクはそれを拒否する！」

「残念だが皐月。お前に拒否権はない……」

「ぬ？人権侵害だ！プライバシーを守れ！」

「諦めろ……上官命令だ」

「お？お？ここはブラック鎮守府に転身したのか？」

イラッ……って表情しなすった司令官が

「お前はまずその遅刻癖を直してから言え。本当のブラック鎮守府に飛ばすぞ」
皐月のほっぺたをみよくと伸ばした。

「はい！いふあい！分かった！分かったよ！」

流石にやり過ぎたと感じた皐月は自分の負けを認めたのだった。

その夜のこと、さっそく部屋に春雨がやって来た。

「……先輩。今日からよろしくお願いします」

「はい、よろしく」

「……先輩。この部屋何ですか？」

「ボクの部屋だよ？」

「そういうことを言ってるんじゃないです！どうしてこんなに汚いんですか!？」

そこは正しく、汚部屋と呼ぶと少し言い過ぎだがそんな感じの部屋だ。

「・・・ゴミは落ちてないだろ？」

確かに、ゴミは落ちていないが・・・

「そういう、問題じゃないです！ああ、服こんなに散らかして！」

「やめろ！それはボクのこだわりで配置してあるんだぞ！君のスペースはあっちにあるじゃないか！」

なおも抵抗する皐月に構わず服の片付けを始める春雨。しかし・・・

「ひゃっ!?ゴキブリ！」

服の下からゴキブリが出てきた。

「ちよっ!?!こつち来ないで下さい!！」

皐月の服でパタパタとやって、あっち行けとやる春雨・・・しかし、ゴキブリは非情にも春雨の方へと・・・

「やめて!やめて!！」

ぺちやっ

「・・・あっ」

そう呟いたのはどっちだっただろう？あるいは両方かもしれない。

「……」

「……」

「……先輩」

「……うん？」

「片付けしましょう？」

「……そうだね」

今日は負け続きだなと皐月は思った。

遅咲きの桜編7―潜水母艦の苦悩―

1月24日（水） PM5:00 ―晴れ―

「提督！私も出撃させて下さい！」

皐月がその声を聞いたのは、出撃の報告書を司令官に渡すために執務室を訪れた時でした。ドアを開ける直前に聞こえたその声は甲高い：：というより幼いと言った感じの声でした。ドアを開けるとそこには一人の少女が司令官と言い合いをしていました。

「いや：：ほら適材適所つてやつでだな」

「私が役立たずだと!?!」

「そうは言つてないだろ：：」

「あれ？大鯨？」

「：：ッ！」

潜水母艦大鯨―主に潜水艦の補給を行ったりする艦である。

「あ：：：皐月：：さん」

自分は鎮守府のエース（他称）なので、あまり仲良くない人とはどうもこんな感じのビミョーな距離感になってしまう。

「で、では私はこれで！提督お願いしますね!？」

と言つて部屋から出ていってしまつた。

「・・・ボクは嫌われてるのかな？」

少し悲しそうに目を伏せる皐月。

「そんなことないさ、怖がられてるだけさ」

と司令官がフオローします。

「それつて、あんまり變わんない気がする・・・」

「そうか？嫌悪と畏怖つてのは似てるようで違ふぞ？」

「・・・まあ、いいや。はい。報告書。」

「ん・・・サンキュー。それと大鯨は演習場の前にいると思うぞ。いつも、あそこにいるし」

「やつぱり、よく見てるじゃないか・・・」

演習場の前に行くとは本当にいた。芝生に座り込んで、駆逐艦達の演習風景をただ眺めている。

「よつとー!」

皐月は大鯨の横に座つた。

「ひやつ!?!・・・皐月さん?」

またそれだ。

「臯月でいいよ。さん付けとか慣れてないから」

「はあ……。いえ、はい。ではそうさせて貰います。さ、臯月ちゃん」

「おっ！急にちゃん付けとは、攻めるね君！いいよ、いいよ！その姿勢好きだよ！」

「あ、あの……。何しに来たのでしょうか？」

おっと、そうだった。

「大鯨はさ……。出撃したいの？」

「それは……」

「正直に言ってみ」

しばらく逡巡してから

「私は……。はい。したいです、出撃。もう鎮守府で皆さんの帰りを待つてるだけなんてイヤなんです。私だって役に立ちたいんです」

と言った。

「あなたは良いですよね？出撃して活躍できて……。あつ！もちろん努力もしないで……。なんて思ってるわけじゃないですよ？ただ……。私には努力するチャンスすら与えられてないんです」

「ほんとにそうかな？」

言い終わったタイミングで皐月が話しだした。

「ボクは誰も待つてない鎮守府に帰るより、誰かが待つてくれてる鎮守府に帰る方がいいな」

「・・・え？」

一瞬何を言われてるのか分からない顔をする。

「それに前線で活躍するのも大事だけどさ、後方で支援してみんなを支えるのはもつと大事なことだと思ふな。後方支援が無いと前線は戦うことすら出来ないんだからね」

「・・・それは・・・」

「ボクなんかさ、出撃から帰ってきた直後何かさ、お腹ペコペコでさ・・・でも、ここに帰ってくればいつも温かいご飯が用意されてるんだ。あれも君が作ってくれたんでしょ？」

「作つただなんて・・・ 鳳翔さんのことを手伝つてるだけです」

と謙遜するが・・・でも・・・

「それでも、だよ。ボクには料理なんて出来ないからね」

皐月は少し恥ずかしそうに言う。前に春雨に作ろうとして大失敗したことがある。

「君は充分に役に立つてるよ。ボクが保証する。それでもまだ出撃したい？」

暗に前線は向いてない。と厳しいことを言う皐月。しかし、大鯨は

「それでも… それでも私は出てみたいんです。前線に」

としつかりと言いつつた。なるほど

「まあ、それならボクが言うことは何も無いよ」

ただ、と臯月は付け加える。

「ただ、勘違いしないで欲しいのは、司令官が言つてた適材適所つて言うのは自分の立ち位置を自分で確定させるつてことだと思つた」

「…自分で？」

大鯨は首を傾げます。

「つまりは、自分の出来ることと出来ないことをハッキリさせて、出来ないことは他人に任せても良いんじゃないかな？つてこと」

まあ、最後のは私論だけだね。と付け加えました。大鯨はまだ首を傾げています。

まあ、いつか分かるよ。と強引に話を切つて、大きく伸びをする。

「久々に真面目な話をしたら疲れたよ。今日の夕飯はなんだい？」

と大鯨に聞くと、

「え？… あつ！やばつ！完全に遅刻！」

慌てて立ち上がったつて律儀にお尻についた芝生を払つてから「失礼します！」と言つて走つていつてしまった。その背中を見つめながら、

「フフツ、懐かしいな。まるで昔の自分を見てるみたいだ」
とつぶやきました。ちなみに夕飯はビーフシチューでした。

遅咲きの桜編 8・前―潜水母艦の苦悩―

1月30日（水） P M 4：00

目の前で少女が怪しく笑っている。フードを被った少女は右手をおでこに当てて敬礼のような形を作つて、何かを探すようにキョロキョロしている。異常なほどに白い肌と背中から伸びるしっぽが彼女が人間では無いことを表している。

―彼女は深海棲艦・レ級。砲撃だけで航空戦、さらには魚雷までマルチにこなす艦である。唯一の難点は敵であること。

「全艦、砲撃用意」

長門が静かに言う。それに合わせて、全員が砲を構える。すると、レ級が何かを見つけた仕草をした。口角がさらにつり上がった。

彼女が両手を広げる。すると、後ろに大量の深海棲艦が出現した。

4時間前

「オーストラリア沖に深海棲艦「レ級」を中心とする中規模艦隊を発見した。我々はこれを撃滅する！」

提督―佐東竜也が壇上で叫んだ。長門を旗艦とする連合艦隊を一つ。空母支援部隊

を一つ編制する。と言つてメンバーを発表した。皐月の名前は連合艦隊の第二艦隊にあつた。また旗艦だよ。

「・・・先輩」

横で春雨が不安そうにしている。

「どうしたん？春雨：不安？」

「・・・はい。レ級といえは軍部の最優先破壊ターゲットになるほどの強敵なので・・・」

皐月は不敵に笑つた。

「おいおい、ボクを誰だと思つてるんだい？駆逐艦皐月だよ？そう簡単に沈まないよ」

「・・・そうですが・・・」

なおも不安そうな春雨。

「・・・大丈夫。ボクは必ずし帰ってくる。君を一人にはしないよ」

最後にまだね、と付け加える皐月。

「・・・約束ですよ？」

「ああ、約束だ」

「連合艦隊、出撃する！」

長門が大きな声で叫んだ。後ろで11人の艦娘がはい！と叫び返す。第一艦隊から、長門、金剛、最上、羽黒、陽炎、不知火。第二艦隊は皐月、神通、阿賀野、文月、黒潮、

雪風の順。さらに、航空部隊は瑞鶴、翔鶴、加賀、響、雷、暁です。戦艦一隻を倒すだけにしてはかなり大規模なものだがそれだけ脅威であるということです。

最初は順調でした。多少は敵の妨害もありましたが、全て予想の範囲内でした。そして……

「全砲門放て！」

長門の号令とともに戦闘が始まりました。

先に仕掛けたのは艦娘側。当たるともわからない一斉射撃です。案の定、レ級には当たりませんが随伴艦にはいくつか被弾しました。叫び声をあげて沈んでいく深海棲艦たち。しかし、レ級たちは気にしたようすもなく、撃ちかえしてきた。

「回避！」

しかし、撃つたさきには既に誰もいなかった。

ここで、後ろの支援部隊から艦載機が到着。艦攻と艦戦が入り交じって飛んでいる。その戦闘機たちがまさに攻撃しようとした瞬間、それが全て破壊された。

「なっ！」

上を見ていた陽炎が絶句する。空に残っていたのはたった数体の艦載機だけ、しかも全て深海棲艦側——レ級が放つたものだった。

「そんな！ たったあれだけで数十機も落とすってどういうの!？」

「……何かが違う。レ級の航空戦力はそこまで高くないはずだ……。ッ！提督にすぐに連絡だ！こいつは恐らくエリートだ！」

エリートとは、同じ級の普通の深海棲艦より性能がはるかに高い個体、艦娘で言うところの改と言ったところだろう。

「……くそっ！」

皐月が珍しく悪態をついた。レ級ですら脅威なのに、そのエリートともなればどれだけの戦闘力を持つているのか想像もつかない。

「……っ！来るぞ！油断するな」

彼女の言葉で回避行動を取り始める。だが、この砲撃により艦隊がバラバラに。指揮も乱れ始めてる。

「第二艦隊！ボクが近づいて直接叩く。援護を」

皐月は第二艦隊に指示を出して、一人でレ級エリートに走り出した。第二艦隊の面々は旗艦に従い、周りの雑魚を皐月に近づけないようにしている。

「私たちも応戦するネー！」

金剛たちが砲撃をしてレ級エリートの行動をしぼる。あと少し……。今！

レ級エリートがこちらに主砲を向けたタイミングで左に逸れる。レ級エリートが左に向けて主砲を放つがそこに居たのは皐月ではなく、仲間の口級である。砲弾は口級に

直撃し悲鳴もあげられずに轟沈していった。しかし、レ級エリートは気にするようすはない。

皐月は主砲を前に撃ちながら突進していく。主砲の次弾装填を終えて、前につきだしたレ級エリートの手をひねりあげる。開いたスペースにゼロ距離からの砲撃と雷撃を繰り返す。余すことのない全弾照射である。ここで初めてレ級の顔が歪んだ。もう片方の腕に付いている主砲で皐月を撃とうとするが、すぐさま弾き飛ばされてしまう。羽黒の精密射撃である。

「……ゲームオーバーだよー」

最後に時限信管の魚雷を海に落としてその場をはなれる。魚雷はレ級エリートの真下で爆発して、彼女の喫水線に穴を開けた。

「……やったのか?」

皐月が呟く。他の艦娘も全員爆発で出来た霧が晴れるのを静かに見ている。しかし、

「……っ!まだ生きてるのか!?!」

そこにいたレ級のエリート様は艦装はぼろぼろで主砲も中程で折れている。だが、まだ生きています。そこに浮いている。その顔に笑みはなく、怒りだけを体現している。

「……くそっ!こっちはもう弾が無いつていうのに!」

皐月が悪態をつくが、それは他の艦娘も同じだ。皐月の護衛のためにほぼ全弾を使っていた。そのおかげで周りの随伴艦はほぼ全滅しているが、”最大脅威”のレ級エリートが残ってしまっている。その”最大脅威”が今こちらに副砲を構えた。

「……こちらには弾薬がない……倒す術がない。……どうすればいい?」
長門がそう呟いた。

T o b e c o n t i n u e d

遅咲きの桜編 8・中―潜水母艦の苦悩―

1月30日(水) PM 5:00

「・・・何!?ちくしょう!分かった!」

最上からの報告を聞き、提督・佐東竜也は机を思い切り叩いた。しかし、今それを諫める秘書艦は戦場にいる。竜也は勢いよく無線機を取った。それは鎮守府内の全スピーカーに繋がっていた。

「緊急連絡だ。下記に読み上げるものは至急執務室に來い。ええ・・・」

10分後に全員が、揃っていた。春雨、山風、卷雲、曙そして大鯨。

「呼び出してすまない。だが緊急だ。現在交戦中の深海棲艦がレ級ではなくレ級エリートであることが判明した。なのでお前らに出撃してもらいたい。目的は・・・洋上補給のためだ」

全員が無言で聞いている。

「恐らく、これまでの戦闘を含めると燃料、弾薬が足りなくなる。大鯨、出番だ」

「・・・はい」

大鯨が緊張気味に頷く。

「あゝ」

静かに手を挙げたのは春雨だった。

「どうした？春雨？」

「大鯨さんは分かるんですが、何故私たちなのですか？」

「お前から以外に駆逐艦がないからだ。大鯨はかなりの速度で移動出来る。それに、一秒でも早く届けたい。悪いが引き受けてくれないか？」

それは構いませんが……と春雨。

「私たちが大丈夫でしょうか？」

「お前からだから信用出来る。何しろ皐月と羽黒の弟子だからな。さあ！あまり時間が無い！5分で出撃だ！」

春雨たちを急かす竜也。春雨たちは慌てて準備にかかる。

海域は比較的静かだった。全員がレ級エリートへの支援に行ったのだろう。なので春雨たちには談笑をする余裕すらあった。もちろん全速力だが。

「へえ、先輩とそんなことがあったんですか」

大鯨の話の聞いて、春雨が相づちをうった。同時に先輩らしいとも思った。

「そうなんです！だから私今スゴく嬉しいんです！やっと出撃出来たんですから！」

曙が出撃なんてそんな良いもんじゃないわよ。と言った。それには春雨も賛成だが、

皐月に連れられて初出撃したときはワクワクしていたなあ、とも思った。

電探を覗いてた山風が、敵発見と言ったことにより部隊に緊張が走る。

「会敵まで5、4、3」

「大丈夫ですよ大鯨さん。私たちが必ず守ってみせますから」

「き、気を付けて下さいね」

「1、0、会敵！」

その声と同時に水平線から姿を表したのは重巡り級が三体、イ級が三体の六体編制。恐らくハグレ艦隊だろう。

「みんなはここで援護射撃をお願い！」

級に春雨が飛び出した。

「「え？」」

三人の声が重なる中、春雨はり級へと突っ込んでいく。り級に砲を構えるヒマを与えずに砲頭をつかみ上と無理やりねじあげる。り級も抵抗したため砲頭がひしゃげて折れてしまった。その折れた砲頭をやりのようにしてり級の喉元に突き刺した。黒いオイルのような液体が筒の中を通ってあふれだしてきた。

苦しみながら命の灯火を消していくり級。

さらに、別のり級（以後、り級2）が春雨に照準をあわせた。すぐさま、未だにもが

いているリ級の後ろに回り込む。その直後に放たれた8 inch 砲弾はリ級へと直撃。悲鳴をあげながら沈んでいくリ級の艦装の破片を手に取りリ級2へと向き直る。

春雨のほうを向いているリ級2が突如横にスライドした。次いで、発砲音。混乱から立ち直つたらしい誰かの支援砲撃だ。

春雨は破片を捨てて、魚雷を発射。その魚雷はゆつくりとしたペースでまた別のリ級（以後、リ級3）に向かつている。一方、リ級3は自分が狙われるとは思わなかったのか、あわてて回避行動をとるが間に合わない。魚雷にあたりひるんだリ級3の首を折り一瞬で命を刈り取る。

最後に、リ級2に向けて砲を撃ちながら近付き、とどめに魚雷を1本。それだけで最後のリ級は沈んでいった。

春雨がさらにイ級たちに向き直るとイ級はビクツとして蜘蛛の子を散らすように逃げていった。

「あははは！あんたサイコーね！」

海の上を走りながら曙が叫んだ。

「そんな… 大したことないって…」

赤面しながら小声で呟く春雨。それに全員が否定の言葉を重ねる。

「お姉様？あれが大したことないのなら私たちはどうなるのですか!？」

「……自動射撃BOT?」

「……あれはちよつと怖かったです」

「え…あれくらい普通じゃないの?」

一方の春雨からはこんな言葉。

「……」

みんなが驚愕しています。性行為について男子に訊ねる箱入り娘を見るような目です。

「……え?私、変なこと言いました?だって駆逐艦はみんなああやって接近して敵を倒していくんじゃないんですか?」

否、”ような”ではなく箱入り娘を見る目に変わりました。

「いや…あんな戦い方するのあんたと、あんたの師匠くらいだよ…」

曙が眩き、みんなが同意します。

「え!?うそ?!私てつきり、みんなこうやって習ってるのかと…」

そのあと、曙先生による駆逐艦の正しい戦い方講座を受けて、先程よりもさらに顔を真っ赤に染める春雨。それを生温かい目で見守る3人と1人。しばらく、ゆるやかな時間流れ、

「……見えてきました」

と大鯨が呟いた。
T o b e c o n t i n u e d

遅咲きの桜編 8・後―潜水母艦の苦惱―

1月30日（水） P M 5 : 30

「みなさ〜くん！補給にまいりました！」

大鯨が力の限り叫ぶ。全員が振り返り、安堵や歓喜の声を上げる。

「まだ、弾が余ってるやつはレ級エリートを牽制！それ以外の者は3分で補給を済ませろ！」

長門がそう指示をだして、全員が了解！と答える。

全員が3分と言わず、1分や2分で補給を切り上げて大鯨に感謝を述べて戦線に復帰していく。

「どうだい？初出撃の感想は？」

補給に来た皐月が言った。彼女は大鯨が来るまでひたすらレ級エリートの注意を引き、砲撃を避け続けたのだ。彼女の服は所々破れ、血もかなりの量出ている。そんな痛々しい姿でなお皐月は不遜な笑みを崩さず大鯨にそう問いかけてきた。

「・・・そうですね。私はここに来るまで守られてばかりでした。改めて自分の無力さを感じていました」

と悲しそうに目を伏せる。自分はやはり向いてないのだと

「……大鯨、前見てごらん」

「……え？」

皐月の言葉の意図を汲みかねていると、皐月はあっちあっちと指をさす。

「レ級のほうだよ。あそこでみんな戦ってる。ちゃんと砲を構えて撃ってる。でも君が来る前はそうじゃなかった。弾が無くなつて攻撃も出来ずにただ逃げ回ってるだけだった。今の攻撃は君が運んできた弾……君が運んできたチャンスだよ。それに、他の人にも言われたでしょ？「ありがとう」って」

「あ……」

大鯨の中の“何か”が吹っ切れる。同時に涙が出てきた。

「私は……ずっと……悩んでいたんです。私なんかここに居てもいいのかな？って出撃も出来ない私なんか……」

と皐月にぶつけるように呟いた。それを皐月は笑って受け止める。

「ボクは最初から言っていたじゃないか。”君は役に立ってる”って」

「……そうですね。正直、あの時はお世辞なんだと思っていました」

ひどいなあ……と皐月が呟く。

「さて、ボクはそろそろ戻らないと。ありがとう。君がいなかったらここで全滅してた

よ。撤退だつてムズカしかったしね。

さあ！ここからはボクの出番だ！」

大鯨が気を付けて下さいね！と叫ぶと皐月は軽く手を振つてそれに答えた。

そのあとの皐月の活躍は凄まじかった。長門に「流星に雷鬼……正に”鬼”だな」と言わしめたほどだ。

レ級エリートが沈むと統率を失つた深海棲艦はバラバラに散つていった。

鎮守府に戻ると、残つていたメンバーや遠征から帰つてきたメンバーに「酒盛り！祝杯！」と誘われたが、全員が「疲れた」と言つて早々休んだため正式な祝杯は明日になつた。

しかし、あくまで”正式”な祝杯は明日なのです。

「へーい、提督から聞いたよ。お前さんが今日のMVPなんだつてなあ。まあまあ飲め飲め！」

そう、お酒を勧めて来たのは酒豪で有名な隼鷹さんだ。

「いや、私はお酒飲まないの……」

とやんわりと断る大鯨。普段は準備をする側なので、参加者として座つているとなんだが不思議な気持ちになります。

目を横に移すと春雨たちも別の酒好きの艦娘に絡まれている。山風はすでに飲んで

いる。駆逐艦は飲んじやいけないと言ふことはないが、元々駆逐艦は飲む子が少ないし、何より絵面的にどうなのだろう？

「おう、やってるな。正式なのは明日やるって言ったのにな」

そこに入ってきたのは、提督—佐東竜也だ。竜也は大鯨を見つけると「いたいた」と呟いて、

「大鯨、ちよつと付き合つてくれるか？」

と言つてきた。

今、大鯨と竜也は執務室に来ていました。

「飲み会中に呼び出して悪かつたな」

構いません、と首を横に振る大鯨。

「そうか、ありがとう。．．．お酒は飲んでないな？」

「飲んでません」

つまり、飲んでいたら話せない重要な用事なのだろう。

「そうか、夜も遅い。さつそく本題に入ろう。先週のことだ。君が抗議に来る三日ほど前だな。軍部から新しい設計図が届いた。名前は軽空母・龍鳳．．．お前だ大鯨」

「っ！．．．そ、それは」

「俺はやろうと思えばお前を軽空母にして戦場に出すことも出来たわけだ」

「じゃあ…。」

「じゃあ、なぜ、あのとときそれを言わなかったのかって？ 答えは簡単だ。お前自身に決めてほしかったからだ。あのとときのお前なら飛び付いただろうが、今は違う。お前はその姿で戦場に出た。どう思った？」

「私は…。」

言葉につまる大鯨にさらに追い討ちをかける竜也。

「自分の無力さを実感して、強くなろうと思ったか？ なら、こいつをお前にやろう。だが、あそこで学んだことは本当にそれだけか？ それだけなら俺は臆月をしばかにやならん」

「…私…強くなりたいです。強くなってみんなを守りたい」

大鯨は声をしぼりだした。それは紛れもない本音だ。

「…そうか… なら、お前にこれを…。」

「でも…。」

竜也の言葉を遮って言葉が続ける。

「でも…今は…今の私に出来ること…私にしか出来ないことをしたいんです。例えば料理とか…。」

しばらく竜也は言葉を失っていたがやがて。

「……そうか。そうだな。んじやこいつはもう要らないな」

と言つて設計図を破り捨てた。

「潜水母艦・大鯨。お前のその選択に後悔はないな？言つておくが……後方でみんなの帰りを待つことほど辛いことはないぞ？」

「……はい。分かつています。いえ、今回、それを実感させられました。だから、私はどんなことがあつても皆さんを笑顔でお迎えします」

「……」

「……提督？」

「……ああ、いや。ずいぶんの変わりようだなと思つて」

「ふふつ、これも皐月ちゃんのおかげですね」

「……そうだな」

夜はこれ以上深くなることはない。あとは明けていくだけ。明日にはまた太陽が登りみんなを照らすだろう。

—潜水母艦の苦惱—end

遅咲きの桜・特別編―節分―

2月3日(日) AM9:00 ―晴れ―

「鬼は外〜!福は内〜!」

そういつて春雨が皐月に向かって豆を投げてきました。早朝のことです。皐月はまだ寝ていました。ご丁寧に袋に入ったまま投げているので、床が汚れる心配も、その豆が食べられなくなる心配もありません。とってもエコです。

「・・・何してるんだい?」

皐月は聞きました。聞かずにはいられませんでした。豆で叩き起こされたからです。人生初です。

「先輩!今日は節分ですよ!節分!せっかくの行事なんだから楽しまないと!」

と楽しそうに答えてきました。つまり..:

「ボクは鬼ってことか?..」

春雨にとつて皐月は鬼のような存在なんでしょう。ちよつとショックです。皐月は床に落ちていた袋を拾い上げて中身を食べ始めました。豆です。豆の味がします。

「普通の豆の味だね」

「それは……豆ですから」

朝食を豆で済ませた皐月が春雨を置いて廊下に出ると、みんながワイワイやっています。駆逐艦たちが鬼のお面を付けた戦艦や空母に豆を投げています。時刻はまだ九時。皐月にとっては早朝です。朝から元気なこつた。と思いながら廊下を歩いていると……

「あつ！師匠だ……！それっ！」

「皐月さん！お覚悟を！」

「鬼は外！鬼は外！」

「これでもくらえっ！」

後ろから豆を投げられました。今度はエコじゃない方。後ろを振り向くと山風、巻雲、曙、そして文月がいました。

「……何で文月がいるのさ？」

文月と皐月は同期で、今は同じ駆逐隊を組んでいます。なので皐月が投げられる側なら当然文月も投げられる側のはずで……

「えへへえ、何かは私はこつち側でいいって司令官がっ」

……まあ、分からなくもない。文月に鬼は似合わないし……

隣では鬼に扮した加賀さんが駆逐艦から投げられた豆を全て口でキャッチするというスゴ技を見せている。……スゴい。あれ練習しようかな？

「あつ！あつちにも鬼がいるぞ〜！」

「ええ〜？どこどこ〜？」

と言いながら四人は長門さんのところに向かつていきました。

しばらく歩くと鬼のお面を被つた羽黒と出会いました。

「あつ……！おはようございます。皐月ちゃん」

「おはようございます。大変そうですね？」

「いいえ……これであの子達が喜んでくれるなら……」

何とも健気なんだろう……。

「ところで、皐月ちゃんはお面被らないのですか？」

と羽黒が聞いてきました。もはやボクは鬼確定か……。ボクだって駆逐艦なんだぞ。

と皐月は思いましたが……。

「それってどこで貰えるんですか？」

そもそもお面を持っていません。

「？執務室で配ってますよ？朝貰いに行かなかつたんですか？」

放送あつたのに……と羽黒は言いますが、皐月は今、起きたばかりでした。

執務室の扉は開いていました。中には一人の……否、一匹の鬼が佇んでいます。棍棒

の代わりにうまい棒を持っています。

「……」

朝に余った豆の袋を開けて、中身を無言で投げつけました。環境に以下略。
「イタタつ……！イタいつて！」

一方、投げつけられた鬼は情けない悲鳴をあげました。そういえば手加減するのを忘れてました。朝ですから。

「本気すぎるだろ！せめて、鬼は外くらい言おうぜ！そもそもお前は鬼だろ！」

皐月の共通認識・鬼。以上証明終了。

「いや……鬼の格好してるのに誰にも豆を投げてもらえなくて可哀想だなんて……」

「可哀想いうな……確かに誰も来なかったけど！」

あつ来なかったのか……可哀想に……

「だから、可哀想がるな！この寝坊助！」

ムツ……それには異議があるぞ！

「司令官、今日は日曜日だ。別に寝坊じゃない」

「皐月……それ以前に節分だ」

「それ以前に日曜日だよ。司令官」

と謎の言い争いもほどほどに、

「はあ、まあい。ほれ」

司令官が鬼のお面を投げてきました。

「それが欲しかったんだろ？ ほら行ってこいよ」

「ボクは別に…」

そもそもなぜ鬼なんだ。と言いかけたところで、皐月は自分が鬼がやりたかったんだ。ということに自覚しました。自分でも不思議です。

「しようがないなあ！ 行ってきてあげるよ！」

そう言っつて執務室を飛びだす皐月。「おうよ」と司令官が皐月の背中を見送りました。その背中では楽しそうに跳ねていました。

遅咲きの桜・特別編—それぞれのバレンタイン前日—

2月13日（水） PM 2:00

皐月はショッピングモールに来ていた。無論、チョコレートを買うために。料理は絶望的に下手なので、手作りは早々諦めた。相手はこれまた聞くまでもない。司令官の佐東竜也だ。皐月にとつて彼は父みたいなものだ。あの人が母親で、竜也が父親。

「やっぱり、これかな…?」

皐月が今いるのは有名ブランドのチョコレート専門店。専門店だけあつて高い。一番高いので、皐月のお小遣いの半月分くらいする。高い。

「うくん、やっぱり高いなあ〜」

はあく、と皐月はため息をつく。司令官以外にもあげなきやいけないからな…とそのブランドチョコレートは諦めることにした。さてどうしたものか…? ?

「これと… あつ! あとこれも…」

所変わつてスーパーマーケット。そのお菓子コーナーで忙しく動く小さな影。ピンのツイントールがピョコピョコ揺れている。春雨である。春雨はバレンタインでチョコを手作りするようです。そのためのチョコ集めをしています。ビターチョコと

ストロベリーチョコを混ぜたらどんな味になるのでしょうか？

「・・・うん、と巻雲ちゃんに、ボノちゃんと山風ちゃん、それに、せ、先輩」

指であげる人たちのことを考える春雨。何故か皐月のところで照れました。何故でしょう？

「お姉様・・・グへへ。お姉様」

そんな、春雨をストーキングする変態がいました。巻雲です。典型的な変態です。ちなみにこの光景を見て通報する人はいませんでした。みんな慣れてしまったのです。

「おっ？お姉様が恥じらっています。一体何を想像したのでしょうか？もしかして・・・きゃくっ！お姉様のエツチ〜！」

・・・やつぱり、通報する人はいませんでした。

「あつ・・・ 師匠が高いチョコ諦めた・・・」

一方、こちらにもストーカーがいました。山風です。視線を向ける先で皐月がため息をついていました。

「・・・ちよつと、チョコを買いにきたんでしょ？」

隣には、曙もいます。

「しっ、今いいところなの・・・ あっ！動いた！追うよ！」

「えっ!?ちよつと!?!」

「あ……春雨」

皐月が向かったのはスーパーマーケットのお菓子売り場。： 当然春雨がいます。

「せ、先輩!」

「君もチョコかい?」

「えっと……そ、そうです! 明日はバレンタインなので、それで手作りしようと……」

「なるほど……手作りか。いいなあ、ボクは作れないからなあ」

「……先輩は止めておいた方がいいと思います」

「……だよね」

「あ、あの私もう行きますね!」

「え? あ……うん。じゃあね」

春雨は失礼します。と言つて早足で去っていききました。

「……何をそんなに急いでいるんだろ? ……おっと、いけないチョコ、チョコっと」

「こ……れはあれでは!」

合流した山風と巻雲が興奮気味に叫んだ。曙はもう好きにしてくれと諦めました。

「あれですね! 確実にバレンタインに告白パティーンですね!」

「女同士でも……応援する頑張れ」

「いや、いや流石にそれはな……」

「いいや！絶対にそうだ！」

あ、そうですか・・・と曙は天を仰いだ。

To be continued

今回、あとがきは無いよ。

遅咲きの桜・特別編—それぞれのバレンタイン（春雨）—

2月14日（木） AM10:00

そしち迎えたバレンタイン当日。春雨は昨日のうちにチョコを作り終えて、箱のなかに入れてあります。型も手作りして、艦装をまとった皐月の形をしていました。さらに顔や制服も彫ってあり、それはそれはまさに芸術でした。食べるのが勿体無いですが、置いておけば溶けてしまいます。他の人の時間は時間が無くてみんなハートの形のもので統一してあります。つまり、皐月のは特別製です。まさか……本命なんじゃ……

「ほ、本命じゃないです！てか本命って何ですか!？」

私は巻雲と言います。本当は今日はお姉様にチョコを渡して一日一緒に過ごそうと思っていたのですが……そうは行かなくなりました！なんと、あのお姉様が今日勝負に出るつもりです！相手はあの皐月師匠です！なので私は今日はいくまで背景に徹して必要ならばお姉様のフォローをする所存です！

「……普通に、チョコを渡して終わるんじゃない？」

などと無粋なことを言っているのは我相棒・曙です。

「……曙。では何故あのとき赤面してたのでしょうか？」

それに皐月師匠のだけ、特別製なものになります！

「チョコを探してるところを見つかつて恥ずかしくなった……とか。春雨ならありそうだし」

まだお認めにならないのですね。いいでしょう。

「ならば、私と賭けをしましょう！お姉様が愛の告白をするかどうか……。そうですね。今日の間宮さんのデザート奢りで」

それに対して曙は……

「ふっ……受けてたつわー！」

と不敵に笑いました。ノリノリですね。

答え合わせの回

「……あの先輩！」

「ん？」

春雨が緊張気味に話しかけてきました。手を後ろに隠しています。

「春雨、ちょうど良かった。君を探してたんだ。はい、チョコレート」

そういつて皐月が渡したのは、有名ブランドのチョコレートでした。高かったやつです。

「あ……、ありがとうございます。あの……私からもこれをどうぞ」

そう言つてラッピングされた箱を差し出してくる春雨。

「お・・・手作り！ありがとっ！開けても？」

「は、はい、もちろん」

「シウルシウルと・・・わっ!?これは・・・ボク？」

箱を開けて中から出てきたもの・・・艦装をまとつた皐月の形をしたチョコレートを見て、皐月は一瞬言葉を失います。

「・・・スゴい！上手い！ウマイじゃなくて上手い！食べるのが勿体無いよ！」

しかし、すぐに驚きの声をあげます。

「ありがとうございます。あの・・・食べないと溶けてしまいますので・・・」

「うん！もちろん。あとで食べるよ。ありがとっ、春雨」

そう言つて箱に皐月チョコを戻して、

「・・・先輩・・・ずっとそばに居てくださいね」

ふと春雨が呟き、皐月に抱きついてきました。

「春雨？」

「先輩・・・好きです・・・だい好きです・・・」

「・・・?!は、はるさも?・・・そ、それって・・・!?!」

明らかにキョドりはじめる皐月。

「……え？そ、それはそ、その…… あつち、方面で？…… って春雨？」

次の言葉が飛んでこないことで少し冷静になり、春雨の方を見る余裕が生まれま
した。

「……ん？」

春雨は寝ていた。すうー、すうーと静かな寝息をたてて眠っていました。まだ10朝
の時です。

「……お酒……？」

春雨は酔っていました。今日、巻雲からもらったウイスキーボンボンで酔っていまし
た。

「ちよつと、あんた！何してんのよ！」

隣で曙が叫んでいます。違うのですよ。それにあなたはそんなに乗り気じゃなかつ
たような…… いや、そうでもないですね。

「曙、あれは違くてですね……。本番でひよつてしまうかもしれない春雨を手助けしよう
と……」

「ほろ酔いにさせた…… はあ…… あんたバカ？」

む…… バカ扱いですか…… 確かに途中まででしたが……

「でも、賭けは私の勝ちですよ？」

「・・・いや、あれは違うでしょ。友人としてみたいなの、人としてみたいなの感じでしょ」
「往生際が悪いですよ！」

「うるさいわね！そもそもあなたが酒なんて盛るから分からなくなっただんでしょ！」

まだ・・・ 言いますか！ぐぬぬ・・・ ! 確かに言う通りではありませんが・・・

「二人とも手伝ってくれないか！」

と臯月師匠に声をかけられました。見つかってしまいました。

少しして、目が覚めた春雨が先程のことを慌てて弁解しました。

「も、もちろん！人としてです！他意はありません！」

遅咲きの桜・特別編―それぞれのバレンタイン（皐月）―

2月14日（水） P M 5：00

夕陽が鮮やかに輝き、執務室をオレンジ色に照らしていました。その中で、提督―佐東竜也は一人で執務をこなしていました。午前中は艦娘たちがチョコレートを渡しに来ていたので、ある意味で忙しかったのです。なにしろこの鎮守府に男は竜也しかいませんから。

なのでこの男、絶賛執務に終われている最中でありました。

「くそ… 加賀め… なんでこういうときにいないんだよ…」

と今はいない秘書艦様のことを愚痴ります。ちなみに加賀は赤城さんと夕食にいきました。おそらく調理場は戦場でしょう。

「やあ、相変わらず忙しそうだね」

「ん？ おおつ、皐月か…」

声をかけられた方を見ると皐月がいました。

「いや、それにしてもいっぱい貰ったね。司令官の写真と一緒にTwitterにアップしようかな…」

言つても居心地の悪い沈黙ではなく、お互いが少しだけ干渉し合い、かといつて触れ合い過ぎることなく、お互いの時間を大切に作る。そんな居心地のよい沈黙。フランスではこういうのを「天使が通つた」と言う場合があるそうだ。

「最近、春雨とはどうだ？」

竜也が何気なく聞きました。

「えへへ、実は今日、春雨から告白を受けたんだよね！」

「お〜！そうか！ついに臯月も結婚するのか！お父さん嬉しいぞ！大丈夫、春雨は信用できるやつだ！」

臯月が目を輝かせて言い、竜也は冗談まじりに返しました。

「もちろん、冗談。でも、人として好きとは言われたよ」

「おつ、そいつは良かったじゃないか。最初はあんなに嫌がつてたのにずいぶんと打ち解けたな」

「う．．．そ、それはほら」

「ああ、分かつてる。分かつてる。お前つて意外にシャイだもんな」

「．．．そういうことじゃないし」

パフッと竜也の膝に頭をのせて寝転がつて拗ねる臯月。それに対して特に気にした様子もなく臯月の頭を撫で始める竜也。臯月は気持ちよさそうに目を細めた。

「全く、お前は甘えん坊だな」

「・・・もうそれでいいよ」

再び、あの居心地のよい沈黙が流れる。天使が通過中だ。

「・・・よつと」

次に沈黙を破ったのは皐月だった。

「そろそろ行くよ。夕食は春雨が作ってくれるんだ！」

そう言っつてパタパタと部屋を出ていく皐月。その背中を見送り、今日はもうやる気ないな・・・と執務机の紙の山を見つめながら加賀さんへの言い訳を考えるのだった。